名古屋女子大学　紀要　63（人・社）323～333　2017

# 領域「表現」における幼児の音楽表現を豊かにする指導法の検討

## －研究コンサート（全３回）の実践から－

白石　朝子

# A Study on Teaching Methods to Develop Children's Musical Expression in the Area of "Expression"

## —Based on Research Concerts（Total of 3 Concerts）—

Asako SHIRAISHI

### １．はじめに

周知のとおり幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「表現」の目標は､「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことである[1)]。表現を生み出すためには、感じたり、考えたりする経験が必要であり、幼児期に様々な音や音楽と触れ合うことの大切さは、多くの先行研究が示していることであろう。

著者は、2014年夏から季節ごとに年４回開催している『ファゴットとピアノと打楽器で贈るおやこ音楽会』で、これまで1000人を超える多くの子供たちと音楽を共有してきた。音楽会では、各季節をテーマにクラシック曲や童謡を中心とした曲目でプログラムを構成し、曲間に子供たちへ語りかけを行う。子供たちとコミュニケーションを図りながら音楽会を進行することが音楽会の大きな特徴の一つであり、この語り掛けの重要性と、そこから生まれる共感については、拙著で既に論じた（白石：2016）。

本研究の目的は、音楽会に関する分析を生かし、新たに幼児の年齢や音楽表現の違いに着目して、音楽と語り掛けに対する幼児の反応を細かく検証、考察することである。特に、領域「表現」のねらいである「（１）いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ、（２）感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」[2)]の２点を重視し、演奏を聴いた子ども達の変化を観察した。研究方法として、全３回の研究コンサートを行い、幼児が音楽表現に対して示した反応や、出演者と幼児の間に生まれた対話を汲み取り、幼児がどのように想像を働かせるのかを探った。そして保護者から回答を得た３種類（事前、終演後、事後）のアンケートを分析することで、客観的な視点から検証した。

本論では、これらの検証結果を通して、音楽表現に対する幼児の姿を捉え、幼児への音楽的な取り組みについて考察したい。

### ２．『研究コンサート』開催概要

研究コンサートは、第１回（平成27年11月）、第２回（平成28年４月）、第３回（平成28年６月）の計３回行った。第１回研究コンサートでは､想像の音を取り入れた《どんぐりころころ》

と、一緒に演奏する《山の音楽家》を中心としたプログラムで構成し、年齢別の反応を観察した。第２回では、振り子時計を用いた《大きな古時計》と音楽紙芝居《ブレーメンの音楽隊》を中心にプログラムを構成し、モノや絵による視覚と、音や音楽による聴覚の相互作用を探った。第３回では、打楽器を加えて、アメリカ人作曲家アンダーソンの作曲作品[3)]を中心に構成することで、物語性のある音楽とその表現による幼児の反応を検証した。

### （1）環境設定とプログラム

研究コンサートの会場は、スタジオ・リリタ（名古屋市西区）である。舞台と客席の段差が少なく距離が近い。舞台にはグランド・ピアノ（スタンウェイM-170）があり、音響はクラシック・コンサートに対応できるよう設計してあるため、申し分ない。客席では保護者分の椅子だけを横一列に並べ、残りは撤去した。子どもには演奏者の間近で聴き、床から伝わる振動を感じながら音楽を体感してもらい、自由に立ち上がったり踊ったりできるよう空間を広く使い、最初は出来るだけ舞台に近い位置で床に座ってもらった。

プログラムは、各回約30分で構成した。第１回、第２回では、最初に子どもにとって親しみのある、楽しい曲を演奏した後、楽器紹介を行った。ピアノ紹介（図１）では、ショパンの作品を演奏し、子どもは間近で演奏者の手を見たり、ピアノの中をのぞいたり、ピアノの下をくぐったりして聴いた。ファゴット紹介では、ピアノと共にピタゴラスイッチを演奏しながらバラバラに分解し、もとの形に戻して演奏を終えた。そして、前述のような曲目を演奏し、最後に《さんぽ》をみんなで歌った。第３回では、台所用品を用いて演奏した《トランペット吹きの休日》からはじまり、ファゴットと打楽器の楽器紹介を行った。詳しい研究コンサートの概要は、表１の通りである。

図１　ピアノの楽器紹介（第２回：３－４歳児）

表１　研究コンサート概要

| 開催日 | 対象者と人数 | 演奏曲目 | 演奏楽器 |
|---|---|---|---|
| 第1回（H27.11.22） | ①　3歳児（15名）<br>②　4歳児（6名）<br>③　5歳児（7名） | ①線路は続くよどこまでも　②楽器紹介（ショパン：即興曲第1番）<br>③楽器紹介（ピタゴラスイッチ）④ぞうさん　⑤どんぐりころころ<br>⑥山の音楽家　⑦ピクニック　⑧さんぽ | ファゴットとピアノ |
| 第2回（H28.4.24） | ①　3-4歳児（15名）<br>②　4-5歳児（6名） | ①ピクニック　②楽器紹介（ショパン：子犬のワルツ）③楽器紹介（ピタゴラスイッチ）④大きな古時計　⑤ブレーメンの音楽隊　⑥おお牧場はみどり　⑦さんぽ | ファゴットとピアノ |
| 第3回（H28.6.19） | 3－5歳児（11名） | ①トランペット吹きの休日　②楽器紹介　③Plink Plank Plunk　④Sandpaper Ballet　⑤ジムノペディ　⑥シンコペーティッド・クロック　⑦舞踏会の美女 | ファゴットとピアノと打楽器 |

### （2）アンケート実施とビデオ撮影

研究協力者は、会場近隣の幼稚園や保育園に通う、３歳児から５歳児の計60組の親子である[4)]。研究コンサートへ親子で参加して頂き、保護者に子どもの様子を観察して頂いた。会場では２台のビデオ撮影と写真撮影を行い、子どもの表情や態度を詳細に分析することを試みた。

また、保護者には、子どもに感想を尋ねながら答えていただく終演後の紙面アンケートのほか、公演約一週間前の事前アンケート（メール）、公演約一週間後の事後アンケート（メール）

と３回のアンケートへの回答をお願いした。アンケートの回収率は100％であった。

事前アンケートの目的は、演奏会に参加する子どもがどのような音楽的環境にあるのかを知ることである。１）保護者及び子供の演奏会経験の有無、２）音楽系習い事に対する経験の有無、３）普段の生活の中で触れる楽器や音楽、という３つの視点から、６つの質問を設定した。

研究協力者の回答結果は、表２の通りである。

アンケート結果から、研究協力者全員が家庭でインターネットやテレビなどを介して音楽体

表２　事前アンケート内容と回答

| 番号 | 質問内容 | あり | なし | 計 ※1 | 記述回答　※２ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 保護者のコンサート経験 | 34 | 10 | 44 | ※３ |
| 2 | 子供連れでのコンサート経験 | 16 | 28 | 44 | キャラクターのコンサート（しまじろう、サンリオ、NHK教育番組など）、オペレッタ、子供のための町のコンサートなど　※４ |
| 3 | 保護者の音楽系習い事経験 | 31 | 13 | 44 | ピアノ(25)　エレクトーン(10)　トランペット、オーボエなどの管楽器(4)　リトミック(1)　ボイストレーニング(1)　※５ |
| 4 | 子供の音楽系習い事経験 | 14 | 30 | 44 | ピアノ(10)　エレクトーン(1)　バイオリン(1) リトミック(2) |
| 5 | 楽器の所有 | 41 | 3 | 44 | ピアノ・電子ピアノ(25)　マラカス、カスタネットなどの打楽器類(34)　鍵盤ハーモニカ(7)　ハーモニカ(2)　バイオリン(3) ※５ |
| 6 | CDやインターネット、テレビを通した音楽体験の有無 | 44 | 0 | 44 | NHK教育番組（おかあさんといっしょ、わんわんといっしょ、クインテット、ムジカピッコリーノなど）、You Tube、市販のCDやDVDなど |

※1 2回目の参加は除く　※2（）内は人数　※3 クラシックに限る　※4 ジャンルを問わない　※5 複数回答あり

験しているものの、コンサートへ行って生演奏に触れた経験のない子どもは、63.6％（44人中28人）にのぼっていることがわかった。

幼児の音楽体験については、ヤマハ音楽研究所による2011年、2013年に４、５歳児を対象として行った大規模な調査をもとにしたレポートがあり[5)]、2011年には66.3％、2013年には71.3％がコンサートへ行かないと回答していることが明らかにされている。本研究協力者の回答結果も同程度の数字を示している。

保護者のコンサート経験や習い事の経験、また楽器の所有割合は８割以上であるため、保護者の関心の高さが表れている。

また終演後アンケートでは、子どもの反応を分析する一助となるよう、１）保護者と子供たちの印象に残った曲目、２）コンサートへの参加態度、３）プログラムのメインとなる曲への反応という３つの視点から、８つの質問を設定した。質問内容は表３の通りである。

表３　終演後アンケート内容

| 番号 | 質問内容 |
|---|---|
| 1 | コンサートに参加する前に親子でコンサートや音楽に関する話をしたか。 |
| 2 | 保護者の印象に残った曲目とその理由　(3つ) |
| 3 | 子供が楽しんだ曲目とその理由　(3つ) |
| 4 | 子供は、コンサート中で演奏者からの語り掛けに応えていたか。 |
| 5 | 子供は、コンサート中に不機嫌になったり帰りたそうになったりしていたか。 |
| 6 | 【重要曲１】子供は話の内容と音楽に関心を寄せていたか。 |
| 7 | 【重要曲２】子供は話の内容と音楽に関心を寄せていたか。 |
| 8 | コンサートを通して子供の音楽に対する反応や想像力を育むプログラムの趣旨は感じられたか。 |

また、１週間後の事後アンケートでは音楽体験の効果を探るため、１）終演後の会話、２）音楽会への参加意欲、３）子供の変化という３つの視点から、４つの質問を設定した。質問内容と研究協力者の回答結果は表４の通りである。

表４　事後アンケート内容と回答

| 番号 | 質問 | あり | なし | わからない | 計 | 記述回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 終演後、子供とコンサートについて話をしたか。 | 60 | 0 | 0 | 60 | 「上手だったね」「楽しかったね」「ファゴットの吹き真似をしていた」「また行きたいね」等 |
| 2 | 保護者は、今後もコンサートへ参加したいか。 | 57 | 1 | 2 | 60 | |
| 3 | 子供は、今後もコンサートへ参加したいか。 | 55 | 0 | 5 | 60 | |
| 4 | コンサート参加後、子供に変化があったか。 | 42 | 18 | 0 | 60 | 「家の楽器で遊ぶようになった」「歌を口ずさむようになった」「楽器に興味を持つようになった」等 |

回答結果から、研究協力者全員が子どもと話をしており、保護者の95％（60人中57人）、子どもの91.6％（同55人）が今後の音楽体験を望んでいることがわかる。その一方で、子どもに「変化があった」と答えた回答者は、70％（同42人）に留まった。「変化」の捉え方にも差異があるため確定的なことは言えないが、保護者が子どもに何かしらの「変化」を感じたことは重要なことではないだろうか。また「変化がなかった」と答えた18名のうち10名は、研究コンサートに参加する前に演奏会へ行った経験をもつ子どもであり、中には「大きな変化はないが、変わらず音楽を楽しんでいる」という記述回答もあった。このことから、演奏会経験のなかった子どもが生の演奏に触れることによって、音楽への関わり方を変化させたといってもよいだろう。

## ３．分析Ⅰ：音楽表現に対する年齢別の反応―《どんぐりころころ》と《山の音楽家》

第１回研究コンサートでは前述（表１参照）の通り、８曲を演奏した。終演後アンケートの問２「保護者の印象に残った曲目（３曲）」と問３「子供が楽しんだ曲目（３曲）」の回答結果をまとめたものが、表５である。

表５　第１回研究コンサートの印象に残った曲目　　※数字は％、（　）内は人数

| 演奏順 | 曲目 | ３歳児 | ４歳児 | ５歳児 | ３歳児保護者 | ４歳児保護者 | ５歳児保護者 | 子供 | 保護者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 線路はつづくよどこまでも | 28.5 (4) | 0.0 (0) | 14.2 (1) | 21.4 (3) | 16.6 (1) | 14.2 (1) | 18.5 (5) | 18.5 (5) |
| 2 | 楽器紹介（ショパン：即興曲第1番） | 28.5 (4) | 50.0 (3) | 71.4 (5) | 42.8 (6) | 50.0 (3) | 57.1 (4) | 44.4 (12) | 48.1 (13) |
| 3 | 楽器紹介（ピタゴラスイッチ） | 50.0 (7) | 66.6 (4) | 14.2 (1) | .57.1 (8) | 33.3 (2) | 42.8 (3) | 44.4 (12) | 48.1 (13) |
| 4 | ぞうさん | 0.0 (0) | 0.0 (0) | 14.2 (1) | 7.0 (1) | 50.0 (3) | 0.0 (0) | 3.7 (1) | 14.8 (4) |
| 5 | どんぐりころころ | 42.8 (6) | 33.3 (2) | 14.2 (1) | 14.0 (2) | 16.6 (1) | 14.2 (1) | 33.3 (9) | 14.8 (4) |
| 6 | 山の音楽家 | 57.1 (8) | 66.6 (4) | 85.7 (6) | 85.7 (12) | 66.6 (4) | 100 (7) | 66.6 (18) | 85.1 (23) |
| 7 | ピクニック | 28.5 (4) | 16.6 (1) | 0.0 (0) | 35.7 (5) | 33.3 (2) | 14.2 (1) | 18.5 (5) | 29.6 (8) |
| 8 | さんぽ | 64.2 (9) | 66.6 (4) | 71.4 (5) | 35.7 (5) | 33.3 (2) | 28.5 (2) | 66.6 (18) | 33.3 (9) |

このプログラムでは、《どんぐりころころ》と《山の音楽家》を重要曲として組み立てた。《どんぐりころころ》では、「想像すること」をねらいとして、歌詞をもとにした話をしながら、どんぐりの転がる音や池に落ちる音をカウベルとピアノで表現したり、歌詞の内容を連想させる音楽を交えて演奏した。

《山の音楽家》では、「協調すること」をねらいとしてタンバリンやカスタネット、トライアングル、すず、カウベル、ウッドブロック、太鼓の打楽器類を並べ、子供たちと一緒に演奏することを試みた。子供たちは６人ずつ舞台に出て好きな楽器を選び、演奏した。

表５からわかるように、《どんぐりころころ》と《山の音楽家》の指数は年齢別にみると全く逆の結果を示している。《どんぐりころころ》は年齢が下がるほど指数が高く、《山の音楽家》

は年齢が上がるほど指数が高くなるのである。保護者より随分指数が高いことも大きな特徴であるといえる。

《どんぐりころころ》に対する反応をまとめた表６からわかるように、３歳児は演奏中、どんぐりのことを心配して不安な表情をみせたり、どんぐりになったつもりでころころ転がるという反応を示した。４歳児、５歳児が静かに聴く姿とは対照的に、３歳児は一つ一つの語り掛けや曲に率直な反応を示していたのである。このことから、３歳児が最も音や語り掛けから想像力を働かせ､《どんぐりころころ》に興味を持ったといえるであろう。このような聴き方は、年齢が上がるとみられなくなるのではないだろうか。

表６　《どんぐりころころ》の演奏と反応

| 番号 | 演奏と語り掛け | 子供の反応（３歳児） | 子供の反応（４歳児） | 子供の反応(５歳児) |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 「皆さんこれは何だかわかりますか。」(どんぐりを見せる) | 口々に「どんぐりでしょ」「どんぐり！」「見たことあるよー」 | 声をそろえて「どんぐりー」 | 乗り出して見る「くぬぎの木になっている。」 |
| 2 | 「これは、どんぐりの帽子です。この帽子をかぶっていたどんぐりさんは、ずっと木の上で暮らしていましたが、ある日、木のてっぺんから山の向こうの方を見てこう思いました。　この木から下りるとどんな世界が待っているんだろう”」 | どんぐりを見ようと近くに寄る。「どんぐりさんは、どこ行くの？」 | 静かに聴く | 静かに聴く |
| 3 | 《演奏》（前奏を用いた音楽） | 静かになる。１名踊る。 | 静かに聴く | 静かに聴く |
| 4 | 「とうとうどんぐりさんは、木から降りて山を降りることにしました。でも途中で野鼠やカラスに食べられちゃったらどうしよう…どんぐりさんは急に怖くなってしまいました。」 | 「そのお話し聞いたことあるよー」 | 楽器を不思議そうに見る（２名） | 静かに聴く |
| 5 | 《演奏》＋カウベル（どんぐりがこわがっているイメージの音楽） | 少し不安そうにする（とても静か） | ２名体を丸める | 演奏者を交互に見る（音の出る方に） |
| 6 | 「どんぐりさんは、それでもやっぱり山の下の世界を見てみようと思いました。初めて木から降りたどんぐりさんは、コロコロコロコロと山を降りていきました。」 | それまで静かだったが、「コロコロ」という言葉に反応して動き回る。 | 静かに聴く | 静かに聴く |
| 7 | 《演奏》（どんぐりが転がるイメージの音楽） | どんぐりになったつもりで走り回り転がる。 | お母さんの方を不安そうに見る。（2名） | 静かに聴く |
| 8 | 「コロコロコロコロと転がっていたどんぐりさんはポチャンと池に落ちてしまいました。どんぐりさんはどうなってしまったでしょう」 | 「じゃあ網でとってあげたら？」 | 少し笑う（１名） | 静かに聴く |
| 9 | 《演奏》　（どんぐりころころの歌メロディー） | ８名が歌を一緒に歌う | ２名が一緒に歌う。 | 静かに聴く |
| 10 | 「そうです、とっても優しいドジョウさんが出てきて一緒に遊んでくれました。でもしばらく一緒に遊んでいたら、どんぐりさんは山に帰りたくなってしまいました。」 | 「だって幼稚園で歌ってるもん」「なんでおうちへかえるの？」 | 静かに聴く | 静かに聴く |
| 11 | 《演奏》（どんぐりころころの歌メロディー） | 歌を一緒に歌う | １名が一緒に歌う。１名が体を動かす。 | １名が小さな声で歌う。 |
| 12 | 「さてさて山に帰っていったどんぐりさん。どうなってしまったか皆さんは知っていますか。池に落ちて体に水をたっぷり吸ったからか、どんぐりさんから若葉の芽が出て、根が生えてぐんぐんぐんぐん体が伸びて、とうとう大きなどんぐりの木になりました。 | 「えーっ」 | 「どろどろになっちゃうよ」 | みんなで顔を見合うが、話はしない。 |
| 13 | 《演奏》（おしまいの華やかな音楽） | 喜んで走り回る。 | 静かに聴く。 | 静かに聴く。 |

その一方で、《山の音楽家》では、楽器選びと演奏に対して、それぞれの年齢で大きな差がみられた。３歳児は、楽器に触れることが大きな目的となっている様子で、音楽（拍子）に合わせたのは、事前アンケートで「音楽の習い事をしている」と答えていた２名のみであった。また４歳児は、隣同士確認しながら楽器を演奏する様子がみられた。お互いに息を合わせるかのように体全体で拍子をとる姿もあり、『合奏』が成り立っていたといえる。

さらに５歳児は、拍子に合わせるだけでなく、曲の中間部に４回出てくる歌詞上の楽器の演奏部分（歌詞：「きゅきゅきゅっきゅっきゅっ」）で、四分音符を３回打つ姿がみられた。演奏者の指示なく、このようなリズムの工夫をしたことには驚かされた。また、５歳児に唯一みられたのは、保護者に聴いてもらっているということを意識した様子である。そのため子どもたちが舞台上での演奏後に、それぞれの保護者のところに駆け寄っていく姿がみられた。終演後

のアンケートでも「緊張した」と答えていた子どもが１名いた。５歳児は単に演奏するというだけでなく､演奏を聴いてもらうという『舞台』を共にする体験を味わったといえるであろう。

そのほか、表７のような様子が観察された。

表７　《山の音楽家》における子供たちの様子

| | 楽器選びの様子 | 演奏中の様子 | 演奏後の様子 |
|---|---|---|---|
| ３歳児 | 色々なものを試し、多くの楽器に触れてから決める。 | 拍子に合わせて打つ（２名）他は自由に打つ。曲が終わると自然に止めた。 | 「もっとやりたい」「これもさわりたい」と口々に言う。興奮状態が続いている。 |
| ４歳児 | 好きな楽器を一目散に選ぶ。 | 隣同士確認しながら演奏。一回目から拍子に合わせて打つことができた。 | 「楽しかった人は？」との問いに全員手を挙げた。 |
| ５歳児 | 一つは決まっているようだが、２，３種類の楽器を試しながら選ぶ。 | 拍子に合わせて打つ他、途中の「きゅきゅきゅっきゅっ」の部分に合わせて打つ。タンバリンや鈴を工夫して打つ幼児（２名） | 保護者のところにかけよる。「面白かった」「楽しかった」と言う。「恥ずかしかった人？」という問いかけに誰も手をあげなかった。 |

## ４．分析Ⅱ：視覚と聴覚の相互作用―《大きな古時計》と《ブレーメンの音楽隊》

第２回の研究コンサートでは、前述（表１参照）の通り、計７曲を演奏した。このプログラムでは､《大きな古時計》と《ブレーメンの音楽隊》を重要な曲目として組み立てた。

《大きな古時計》（図２）では、表８の構成で、語り掛けと演奏を行った。

表８　《大きな古時計》の語り掛けと演奏内容

| | |
|---|---|
| 1 | 「これは何だかわかりますか。そうですね、時計です。この時計は、長野にあるおじいちゃん、おばあちゃんの家の物置に置いてありました。むかし使っていたのだけれど、お家を新しく建て直した時に使わなくなってしまいました。せっかくのきれいな時計を使わないのは、もったいないので貰ってきたのです。でも動いていないみたいですね。壊れてるのかな。」 |
| 2 | 《演奏》 |
| 3 | 「これは振り子時計と言います。振り子とは、これのことです。」（振り子を見せる）「この振り子は、ここにつけます。（振り子をつける）「動くかな？」 |
| 4 | 《演奏》 |
| 5 | 「まだ動かないみたいですね。そうだ、ねじを巻かないと動かないんだった。」（ねじを巻く） |
| 6 | 《演奏》 |
| 7 | 「シーッ！」（振り子を動かす）「ほら、時計の動く音が聞こえますか。」 |
| 8 | 《演奏》 |
| 9 | （時計の音が鳴る） |

そして《ブレーメンの音楽隊》（図３）は田邊武士氏[6)]が脚本と作曲、松涛美杉氏[7)]が絵を描いた音楽紙芝居である。田邊氏（ファゴット奏者）が①ナレーション､②ロバ､③ニワトリ、④泥棒１、⑤泥棒３を演じ、筆者（ピアニスト）が、①イヌ、②ネコ、③泥棒２を演じながら演奏した。

終演後に行ったアンケートの問２「保護者の印象に残った曲目（３曲)」と問３「子供が楽しんだ曲目（３曲)」の回答結果をまとめたものが、表９である。

表９から､《大きな古時計》は、子ども、特に３歳児にはあまり印象に残らなかったことが読み取れる。この原因として語り掛けの内容がやや難しかったことと、時計に対する関心度の

図２　大きな古時計（第２回：４－５歳児）

図３　ブレーメンの音楽隊(第２回：３－４歳児)

表９　第２回研究コンサートの印象に残った曲目　※数字は%、() 内は人数

| 番号 | 曲目 | ３歳児 | ４歳児 | ５歳児 | ３歳児保護者 | ４歳児保護者 | ５歳児保護者 | 子供 | 保護者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ピクニック | 28.5 (2) | 27.2 (3) | 0.0 (0) | 0.0 (0) | 27.2 (3) | 0.0 (0) | 23.8 (5) | 13.6 (3) |
| 2 | 楽器紹介（ショパン：子犬のワルツ） | 85.7 (6) | 36.3 (4) | 33.3 (1) | 75.0 (6) | 63.6 (7) | 66.6 (2) | 47.6 (10) | 68.1 (15) |
| 3 | 楽器紹介（ピタゴラスイッチ） | 14.2 (1) | 63.6 (7) | 66.6 (2) | 37.5 (3) | 45.4 (5) | 33.3 (1) | 42.8 (9) | 40.9 (9) |
| 4 | 大きな古時計 | 14.2 (1) | 54.5 (6) | 33.3 (1) | 37.5 (3) | 63.6 (7) | 100 (3) | 38.0 (8) | 59.0 (13) |
| 5 | ブレーメンの音楽隊 | 85.7 (6) | 63.6 (7) | 100 (3) | 100 (8) | 72.7 (8) | 66.6 (2) | 76.1 (16) | 81.8 (18) |
| 6 | おお牧場はみどり | 14.2 (1) | 0.0 (0) | 0.0 (0) | 12.5 (1) | 0.0 (0) | 0.0 (0) | 4.7 (1) | 4.5 (1) |
| 7 | さんぽ | 57.1 (4) | 54.5 (6) | 66.6 (2) | 37.5 (3) | 27.2 (3) | 33.3 (1) | 61.9 (13) | 31.8 (7) |

低さが考えられる。初めて見る振り子時計を子どもはじっと眺める一方で、想像力は働かなかった。この理由として、語り掛けと歌詞の内容との結びつきが弱く、演奏者が想像力を働かせるアプローチができなかったことが考えられる。

しかし、《ブレーメンの音楽隊》は、全体を通して高い指数を示した。15分程度の比較的長い演目であったが、３歳児も目をそらすことなく集中して舞台を見ていた。このことは、プログラム中のほかの曲目と全く違う点であろう。特に田邊氏と筆者の掛け合いでは、子ども全員が、話をしている演奏者へ顔を向け、左右に首を動かしている様子を観察できた。音楽紙芝居においては、音楽がストーリーの想像を膨らませる一助となり、視覚と聴覚が相互に作用して、子どもの集中度を高めたといえる。終演後アンケートでは、《ブレーメンの音楽隊》に対して「紙芝居に曲を交えていたので風景が目に浮かぶようだった」「音楽とせりふのおかげで真剣に聞いていた」という回答がみられた。子どもも保護者も、話に展開があり、それぞれの場面において感情を動かしたため、《ブレーメンの音楽隊》は印象にのこったのだろう。

## ５．分析Ⅲ：物語性のある音楽とその表現に対する反応－アンダーソンの作品を中心に

第３回の研究コンサートでは、前述（表１参照）の通り、全７曲を演奏した。今回は、前２回と異なり、打楽器奏者の林美春氏[8)]を交えて、アンダーソンの作曲作品とサティ[9)]《ジムノペディ》で構成した。演奏内容と子どもの反応は、表10の通りである。

プログラム設定の意図は前回の《ブレーメンの音楽隊》のような、物語に音楽を添えるのではなく、音楽で物語を作ることで子どもがどのような反応を示すかを検証するためである[10)]。また童謡やアニメ・ソングのような幼児に親しみのない作品で構成されたプログラムが、どの

表10　第３回研究コンサートの語り掛けと演奏内容に対する子供の反応

| タイム | 演奏曲もしくは語り掛け | 演奏内容もしくは語り掛けの内容 | 子供の反応 |
|---|---|---|---|
| 0'00 | 開演前 | 「なにが始まるんだろうね」と少し会話をする。 | 舞台に並べられたフライパンやまな板、ボールに興味深々 |
| 2'00 | ①　トランペット吹きの休日 | テーマは「朝食づくり」。打楽器奏者が、エプロンをして登場。フライパン、ボール、泡だて器、コップなどを使用して演奏。 | 「なにをやってるの？」と不思議そうに見ている。 |
| 5'30 | 語り掛け（展開） | 皆さん、おはようございます。いま、音楽をしながら朝ご飯を作っていましたね。そうだね、水が入ってるね。水の量がちがうと音が変わるんですよ。 | 「おはようございます」と元気にあいさつをかえす。楽器を片付ける打楽器奏者をみて、「みずがはいってる！」「ほんとだ」と口々に言う。 |
| 6'00 | 語り掛け（あいさつ） | 今日は、こんな楽しい音楽をたくさん演奏します。新幹線のようにはやい曲もあるし、汽車のようにおそーい曲もあります。楽しくて体が動き出しちゃう曲や、ふああああ（あくび）と眠くなっちゃう曲もあるかもしれません。そんなときは踊ってもいいですし、寝ちゃってもよいですよ。皆さんの好きなように音楽を楽しんでください。 | 静かに聞いていたが、「寝ちゃってもいいですよ」の語り掛けに、「いやだ」「いやだ」「ねたくない」と言う。 |
| 6'40 | 語り掛け（楽器について） | さて、みなさん、さきほど私はみんなをフライパンで起こしながら演奏しました。私の演奏する楽器はなんだか知っていますか？とてもたくさんあるでしょう。私の演奏する楽器は打楽器と言って、たたいたりふったり、こすったりして音を出します。 | 問いかけに対して「しらない」と即答する。打楽器と聞いて、「だがっき！きいたことがある」「ある！」［ある！」と口々に言う。 |
| 7'30 | ②−1　楽器紹介（打楽器） | ほらみてね、「とんとんとん」（包丁の音）この音、どこかできいたことないですか？それから、これには秘密の調味料が入っています。「しゃっしゃっしゃっ」（容器を振る音）「しゃかしゃかしゃか」（混ぜる音）それから、こんなに本物の楽器も持ってきました。ぜひ楽しんでたくさんの音楽を聴いてください。 | 調味料の容器を見て「ビーズだから食べれないよ」本物の楽器の中からタンバリンを見つけて「その楽器知ってるよタンバリンでしょ」 |
| 8'25 | ②−2　楽器紹介（ファゴット） | ファゴットを順に分解して「どこから音がでるのかな」と問いかける。これだけで音が出るかな？ちょっとずつ増やしていくとファゴットの音になってくるよ。」と言って「かえるのうた」を吹く。 | 問いかけに対して、「ここ」「ここ」と指をさす。また、「かえるのうた」を音名や歌詞で一緒にうたう。 |
| 11'40 | 語り掛け（導入） | みんなおやつ食べてきた？ああ美春さんのお話しを聞いていたら、お腹が空いてきちゃった。そろそろおやつが食べたいなあ。あれ？こんなところにとうもろこしがある！とうもろこしは、おいしいよね。みんな好きかな？そうだ、美春さんにこれでお菓子を作ってもらおう。みんな、とうもろこしからできるお菓子、何だか知ってる？ | 「みんなおやつ食べてきた？」の問いかけに「まだたべてないよ」「これからマクドナルドにいく」「おかしをたべたいよ」と言う。また「あれ？」という言葉に「とうもろこしでしょう」と反応。「えっとうもろこしからてがとれた」と驚く。 |
| 12'20 | ③　P link P lank P lunk | テーマは「おやつ作り」とうもろこしから抜いた手（ばちになる）を使って演奏する。途中でフライパンを登場させ、ポップコーンにするためには、拍手が必要と言って、拍手を要求する。拍手が大きくなったところで変身させ、演奏を続ける。 | 「なにがはじまるの？」ポップコーンへの変身では、一生懸命に拍手をする姿がみられる。演奏後には、自然に拍手が起こった。「みえてたよ」という。 |
| 14'50 | 語り掛け（導入） | ポップコーン、おいしいな～。あ、おとしちゃった！あれ、よく見たら、こんなところに埃が…あっゴミも…田邊さん、美春さん！お掃除をお願いします！ | 「それ、おそうじでしょ！」「なににつかうの？」「ポップコーン食べたい！」「食べていい？」と口々に言う。 |
| 15'30 | ④　Sandpaper Ballet | テーマは「そうじ」机をデッキブラシで掃除したり、マラカスをつけたはたきを使用したり、ごみ箱を叩きながら演奏。 | 「ここも汚れてるよ」「うるさい」「なにをしてるの？」「あそんでないでそうじしなさい」と大きな声で話す。 |
| 18'20 | 語り掛け（導入） | ふぁぁ（あくび）　お掃除したら疲れちゃったなあ。なんだか眠くなってきた。お昼寝しようっと。みんなも眠くなってきたんじゃない？　ゴロンと横になってみようよ。（電気を消す）お口を閉じて。シーっ。 | 「だめだよ！ねたら」と寝るのをいやがる。電気が暗くなると、「もっとまっくらにして！」と言う。なかなか静かにならずない。 |
| 19'20 | ⑤　ジムノペディ | テーマは「昼寝」ゆったりと、静かに演奏すえ。 | 最初は騒がしがったが、徐々に静かになってくる。「いいおとしない」「うるさい」と最後までいう幼児が二人いるが、残りの子供たちは静かにしている。 |
| 22'22 | 語り掛け（導入） | ジリリリリ（目覚まし時計を鳴らす）みんな、起きてください！お昼寝の時間もおしまい。目が覚める、とっておきの音楽を演奏するよ。それにはこんな道具を使います。ウッドブロックという楽器だよ。 | 目覚まし時計の音に驚いた反応をする。「めざましどけいだ」ウッドブロックには、「このおと、きいたことがある」 |
| 23'10 | ⑥　シンコペーティッド・クロック | テーマは「目覚め」ウッドブロックをならしながら演奏。途中で目覚まし時計を鳴らす。 | 発言が少なくなり、演奏に集中し始める。目覚まし時計の音に「うるさいー」と嬉しそうにする。 |
| 25'25 | 語り掛け（導入） | みんな、すっかり目が覚めたね！目覚まし時計、びっくりしたけど、音楽になって楽しいね。それでは、最後にみんなで踊りたくなる素敵な曲を演奏するよ。みんなにも手作りのマラカスを配ります。ポップコーンが入っているよ、こうやって振りながら踊ってみてね。（子供たちに配る） | 「さいごなんてやだー」「もっとききたい」という声が上がる。マラカスを配ると、「やったー、ぷれぜんとだ」「ぽっぷこーんがいい」「どうやってふるの？」と子供同士でみせあったり、母親に聞く姿が見られた。 |
| 28'20 | ⑦　舞踏会の美女 | テーマは「お出かけ」ワルツのリズムに揺られながら楽しく子供たちも一緒に演奏する。 | 楽器があるからか私語はなく、音楽に合わせて体を動かしていた。 |
| 31'00 | 終演 | アンケートへの記入をお願いする。 | 演奏者のほうに寄ってきて話をする。 |

ように受け入れられるのかにも注目した。

終演後に行ったアンケート問２「保護者の印象に残った曲目（３曲）」と問３「子どもが楽しんだ曲目（３曲）」の回答結果をまとめたものが、表11である。

《トランペット吹きの休日》（図４）で子どもの人気が高かった理由は、楽器を使わず日用品（台所用品）を使用したことが挙げられるだろう。アンケートでは､「食器が楽器になると話したり、興味深く見ていた」や「楽器でないものでも音が出るものがたくさんあった」「知っているものが楽器になっていた」という理由が挙げられた。また《舞踏会の美女》は、楽器を伴った参加型の曲目であったため、子ども

表11　第３回研究コンサートの印象に残った曲目

※数字は%、（　）内は人数

| 番号 | 曲目 | 幼児 | 保護者 |
|---|---|---|---|
| 1 | トランペット吹きの休日 | 83.3 (10) | 50.0 (6) |
| 2 | 楽器紹介 | 33.3 (4) | 25.0 (3) |
| 3 | P link P lank P lunk | 33.3 (4) | 33.3 (4) |
| 4 | Sandpaper Ballet | 33.3 (4) | 16.6 (2) |
| 5 | ジムノペディ | 8.3 (1) | 66.6 (8) |
| 6 | シンコペーティッド・クロック | 33.3 (4) | 41.6 (5) |
| 7 | 舞踏会の美女 | 66.6 (8) | 66.6 (8) |

と保護者双方が印象に残ったと推測される。

一方で、《ジムノペディ》（図５）では、静かに音楽を聴くことを目指したが、興奮が冷めない子どもが２人いたため､周りも影響されていたことが低い数値に表れている。会場を暗くし、語り掛けによって、『闇』や『夜』を想像してもらい、静かになることを狙ったが、思うようにはいかなかった。しかし、全く受け入れられなかったわけではなく、この曲目を選んだ幼児の保護者は、アンケートで、幼児が「全くしゃべらず、ずっと目を閉じて音楽の世界に入っていた」と答えた。演奏者側の配慮や子供たちへの語り掛けの工夫によって、ずいぶん反応が変わる作品であろう。また保護者からは、「心が休まったから」「好きな曲だから」「ゆったりしたから」などの回答があり、《ジムノペディ》への印象には明らかな差がみられた。

図４　トランペット吹きの休日（第３回）

図５　ジムノペディ（第３回）

## ６．まとめ

本論を通して『研究コンサート』の開催内容とアンケートをもとに、幼児への音楽的な取り組みに対する考察を行った。

分析Ⅰでは､第１回研究コンサートをもとに音楽表現に対する年齢別の反応を検証した。《どんぐりころころ》では、３歳児が特に音や語り掛けから想像力を働かせ、自らがどんぐりになるなど表現へとつながり、年齢別に反応が異なることが明らかになった。

分析Ⅱでは、第２回研究コンサートをもとに視覚と聴覚の相互作用について検証した。音楽紙芝居《ブレーメンの音楽隊》は、どの年齢にも受け入れられ、ほかの曲目に比べて明らかに集中度が高く、音楽がストーリーの各場面で想像力を働かせるために役割を果たしたことが明らかになった。

分析Ⅲでは、第３回研究コンサートをもとに、物語性のある音楽とその表現に対する反応を検証した。日常で見慣れている日用品が楽器になり、音楽表現になることが幼児の興味を強くひいた。幼児にとって馴染みのない作品でも、表現の工夫によって受け入れられることが明らかになった。

本研究を通して、演奏を体感した子どもたちからは「自分なりの表現」を楽しむ姿がみられた。「いろいろなものの美しさ」は､プロの演奏者による音楽に限らず､身近な日用品による「音」の表現や簡単なリズム楽器による「音楽」によっても生み出すことができるであろう。今後も研究を続けるとともに、考察内容を授業へ反映させて、学生への指導を行う予定である。この授業実践については、稿を改めて論じることとする。

## 【謝辞】

本研究において、平成27年度、28年度名古屋女子大学教育基盤研究助成を頂きました。
そして演奏家の立場から多くの示唆を与えてくださった田邊武士氏と林美春氏、また研究にご協力くださった親子の皆様、研究協力者募集においてお力添えくださった幼稚園や保育園の先生方に心よりお礼申し上げます。

## 脚注

1）文部科学省：2008、厚生労働省：2008、内閣府・文部科学省・厚生労働省：2015。
2）同上
3）ルロイ・アンダーソン（Leroy Anderson 1908-1975）
4）名古屋市西区内の幼稚園、保育園へチラシ掲示・配布を依頼した。
5）「現代における子供と音楽のとのかかわり」pp.19-20。『ヤマハ音楽研究所　調査レポート』2013年5月。http://www.yamaha-mf.or.jp/onken/report/pdf/rpt004_parents2013.pdf（2016年９月12日最終サクセス）
6）田邉武士（ファゴット奏者）”Teatro Musicale／音楽の劇場”代表
7）松涛美杉　フリーのデザイナー、カメラマンとして活動
8）林美春（打楽器奏者）フルート・マリンバ・打楽器による“フルリン打”メンバー
9）エリック・サティ（Erik Satie 1866-1925）
10)「物語性」のある音楽については（白石朝子：2016）参照。

## 参考文献

石井玲子編著　2009『実践しながら学ぶ子どもの表現』大阪：保育出版社。
小川容子・今川恭子　2008『音楽する子どもをつかまえたい―実験研究者とフィールドワーカーの対話』岡山：ふくろう書店。
白石昌子　2006「乳幼児の発達と音楽の関係」『福島大学人間発達文化学論集』第３号：13-24。
白石朝子　2016「乳幼児向け演奏会のプログラムに対する一考察―『おやこ音楽会』の開催をもとに」『名古屋女子大学紀要』第62号：283－293。
戸川晃子　2013「クラシック音楽の生演奏が未就学児にあたえる影響についての一考察」『神戸常磐大学紀要』第６号：35-47。
豊田典子・豊田秀雄・荒川恵子・岡林典子・内田博世　2014「科学的内容を導入した幼稚園訪問演奏会の実践報告―天体と音の物理的側面に着目して―」『大阪人間科学大学紀要』第13号：57-73。
文部科学省　2008『幼稚園教育要領解説』東京：フレーベル館。
厚生労働省　2008『保育所保育指針解説書』東京：フレーベル館。
内閣府・文部科学省・厚生労働省　2015『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』東京：フレーベル館。

## Abstract

The purpose of this research was to inspect in detail the response of children to music and speaking, and consider the results in order to utilize them in children’s education.

The research method used was to conduct a total of 3 research concerts, understand the reactions given by the children to the musical expression and the dialogue generated between the performers were recorded, and the engagement of the children's imagination was analyzed. By subsequently analyzing 3 types of questionnaires (given before the concert, when the concert had ended, and afterwards) for which we obtained responses from the guardians, we conducted verification from an objective point of view.

This research revealed the differences in the children's interaction with music by age, as well as in the level of concentration during the musical program and imagination through the interaction of the senses of "vision" and "hearing". The results of this study will be useful for coaching kindergarten teachers and childcare providers which can be applied to musical training at kindergartens and nursery schools.